

1 分野別方針について

全体

現状と課題について

- ・ ボランティア潜在層へのアプローチ。募集情報が回覧板などを活用して目に触れるための工夫や、大学入試の際に、履歴書にボランティア経験を書かせるなど、インセンティブが働く知恵を絞る。
- ・ 子どものころからの意識づけが大切。
- ・ 点字ブロックひとつをとっても、車椅子の方と視覚障害のある方とでは捉え方が違うもの。どのような視点で考えることがバリアフリーなのか。
- ・ 人と車のあり方、問題を京都市全体で考えないと福祉3分野の重要課題が解決されないのではないか。
- ・ 市内の地域格差を脅威に入れるべき。自宅から離れているため、施設に通うだけでも大変な地域もある。

政策の基本方向について

- ・ 市民の意識として、「違いが共にある地域、社会」にしていく。
- ・ 多世代交流。高齢者に子育てに携わってもらうことを打ち出す。
- ・ 若年性認知症について、若くして障害を持たれた方として捉え、問題を考えるべき。居場所づくりとしては、地域の中に一緒に食べる場所をつくるのが有効である。
- ・ 福祉分野には、雇用を生み出す力がある。雇用が確保され生活保護率が下がれば、結果的に財政は良くなる。
- ・ 福祉政策は、老人や障害者は救済されるべき弱者であるという考えの上で議論されてきた。これを変えないと障害者、地域、高齢者の尊厳性は回復されない。

市民と行政の役割分担と共汗について

- ・ 地域の中で、高齢者や障害を持つ子どもたちの居場所や、役割などを作っていく仕掛けが必要である。

高齢者福祉

- ・ 「市長による成年後見等開始申立て件数」が少ない。「契約」をクリアできない方も受け入れざるを得ない施設が困っている現状がある。

- ・ 低栄養にならないような介護予防のための食事の対策が必要である。

- ・ 子や孫を一生懸命養っても、老後を見てもらえない。高齢者は地域で看る時代が来た。

地域福祉

- ・ 相談センターが地域づくりの拠点となるためには、縦割りでなく、総合的ないし統合された機能を果たせる相談センターでなければならない。
- ・ P T A活動から地域の役員へのリクルート。地域役員の高齢化を克服する。
- ・ コミュニティビジネスを地域福祉のところでどのように打ち出すか。

- ・ 当事者の社会参加の多様化。高齢者に小中学校で体験談をしていただく。
- ・ 増加する高齢者を含めた地域力を向上させる理念と施策が創造されることで、社会の進歩が実現する。
- ・ 多文化共生を入れるべき。地域がマイノリティの方々と共に生きる「ソーシャルインクルージョン」が国際的な理念となっている。

障害者福祉

- ・ 支えあうまち・京のほほえみプラン制定による市民意識の変化を検証する必要がある。
- ・ 京都は「違いが共にあるまち」ではない。例えば、重症心身障害児施設などが抱える大変さが隠されてしまっている感じがする。
- ・ 障害者の地域デビューを意識的に行う。施設と自宅との往復では地域に顔が見えない。

- ・ 障害のある人の権利条約批准への流れを踏まえ、政策を準備しておく必要がある。
- ・ 支えあうまち・京のほほえみプラン「幼稚園における総合育成支援教育の推進」に「子どもたちの心を育てていく。心を自然な形で育む。」という言葉は足して頂きたい。
- ・ 幼児教育の段階から障害を持つ方々とともに遊んだりすることが重要である。
- ・ 初等～高等教育の中で、障害を持つ方々と交わるプログラムを展開すれば、若い世代からノーマライゼーションの能動者の育成につながるのではないか。

2 京都の未来像と重点戦略

京都の未来像について

- ・ 男女ともに参画して、新しい命を世に出し、育て上げて豊かな社会をつくる視点を一步踏み込んで表現する。
- ・ 「人材を育てる」に、成熟（マチュア）、知恵（ウィズダム）をもっと出すべき。これらは京都の大事な文化であり、強みでもある。
- ・ 低炭素だけの打ち出しはどうか。生態系、命の循環、命の支え合いが必要だ。
- ・ 「弱者」はいない。弱い立場の人はいる。絶対に使ってほしくない言葉である。
- ・ 「人材を育てる」のところは、一人一人の現にある姿が大事にされる未来の夢のような表現の方が私たちの思いに近い。
- ・ 資料3のチャートを見ると低炭素が最上位といった政策のプライオリティが出ている気がする。これが京都市の見識かと問われたときに議論になるのではと危惧する。

その他

- ・ 都市経営の理念に「参加と協働で未来を開く」とあるが、「参画と協働」の方がいい。